

軍事史学

第56巻 第1号

巻頭言

敗戦のなかの「僥倖」と「勝利」 庄司潤一郎

戦争の終結をめぐって、ドイツでは「解放」(ナチズムからの解放)か「敗北(崩壊)」か、日本では「終戦」か「敗戦」かという議論がなされている。確かに、ドイツは、ヒトラーの自暴自棄の狂気のなかベルリン陥落を迎えたが、日本は、昭和天皇の「聖断」によって、ドイツに比べ戦争を早期に終結させることができたのである。

本土決戦が行われていけば、より一層の日米両国の人的犠牲に加え、ドイツのように国土の荒廃が生じ、直接統治を受け、さらに分断国家となっていた可能性も否定できない。

無条件降伏という厳しい条件にもかかわらず、「敗戦」という軍事的な敗北の状況において「終戦」を迎えた要因の一つは、戦争目的が、これまでの「自存自衛」「大東亜共栄圏の建設」から、「国体護持」に限定されたことである。一方、ドイツの戦争は、「絶滅戦争」、すなわち勝利か破滅かの戦いであり、妥協による和平は想定されていなかったのである。

第二に、日米両国におけるいわゆる「穏健派」の存在と、敵対関係にもかかわらず日米間に存続した「信頼関係」の絆である。特に、米国における「知日派」と彼らの奮闘は、「敗戦のなかの僥倖」(五百旗頭真)と評されたのである。

第三に、本土決戦をめぐる日米のギャップである。日本軍の本土決戦準備の状況は不完全で貧弱であったが、それを通して初めて明瞭に示された天皇の陸軍そのものに対する不信任は、陸軍に戦争を継続することを断念させるのに、戦局の悪化という軍事的理由以上に大きな効果をもたらした。

一方、米国にとって、このような日本側の不備にもかかわらず、上陸作戦が迫るにつれ、生じ得る人的損害が最大の問題となった。すなわち、膨大な残存兵力と想定された玉砕攻撃は脅威であり、硫黄島・沖縄における日本軍の抵抗で苦戦を強いられた体験は大きいものがあつた。こうして、米国は、軍事的コストを懸念し、無条件降伏の再検討を迫られたのであつた。軍事史家のジョン・フェリス(John Ferris)は、太平洋の戦場で米軍に多大な犠牲を強い日本軍の戦力と戦闘は、「幾つかの政治的目標を達成したのである。日本の敗北はある種の勝利であつたと指摘している。

このように、日本の戦争終結は、困難、犠牲、そして「僥倖」をもたなつて達成されたのであつた。さらに、「終戦」という特異な戦争終結の形態により、「不完全な」勝利・解放の問題が戦後東アジアに大きな「遺産」として残り、歴史認識問題など心理面において現在にまで影響を及ぼしている。「屈辱」の回復や、暴力と和解の専門家であるマーサ・ミノウ(Martha Minow)が指摘する「復讐の衡平」がなされなかつたのである。

日本の戦争終結は、もちろん軍事的には「敗戦」であつたが、まさに「終戦」でもあつた所以はここにある。ポツダム宣言は冒頭において、「日本国ニ対シテ今次ノ戦争ヲ終結スル(To end this war)ノ機会ヲ与フルコトニ意見一致セリ」と述べていたのである。

(軍事史学会副会長)